一

次の文を読んで、後の問に答えよ。（五〇点）

もうかれこれ三十何年も前の話である。当時、私は京都大学の学生で、北白川に下宿し、やはり東京から来て同じ区域にいた何人かと特に親しいグループを作っていた。（今でも親しくつき合っている。）いずれも気儘（きまま）な者ばかりだったが、ただ兄貴株の山崎深造だけは別であった。彼はおだやかな、思いやりの深い、そして晴れやかな落着きを感じさせるような人間で、時にはかなり辛辣な皮肉も言ったが、不思議に少しも嫌な気持が起らなかった。彼だけは既におとなであった。

京都へ来て二年目の六月に、私は熱を出し、チ*ブスの疑いがあるというので入院させられることになった。

そのとき彼は、私の蒲団（ふとん）があまり汚れているというので、自分のを分けて貸してくれた。そして入院の手続きから必要な買物まで、万事世話をしてくれた。幸いチブスではないとわかって、半月程して退院したが、医師のすすめで、そろそろ始まる夏休みには東京へ帰らずに郷里で保養することにした。それで、退院の直後、私は彼の下宿の部屋で雑談しながら、郷里の海や景色の美しさ、軽いボートを操って釣をしたり泳いだりして遊ぶ楽しさのことなどを、はずんだ気持で、調子づいて話していた。その時、彼は突然軽く笑いながら、一言、「君も随分おぼっちゃんだなア」と言った。そしてそれが私には(1)「忘れ得ぬ言葉」になってしまった。彼はその言葉を嘲りや嫌味の気持で言ったわけではない。彼はそういう、自分自身を卑しめるたぐいのことは、もともと出来ない人柄であった。だから、単にからかい半分の軽い気持で言ったに違いない。しかしそれを聞いた私にとっては、その一言は何かハッとさせるものをもっていた。私はその時の自分の心が自分自身のことで一杯になっていて、彼の友情、彼が私のために払ってくれた犠牲、についての思いが、そこに少しも影を落していないことに気付かされた。しかもその時の自分のそういう心持というばかりでなく、自分というもの、それまでの自分の心の持ち方というものが、鏡にうつし出されたかのような感じであった。いわば生れてからこのかたの自分に突然サイド・ライトが当てられて、それまで気が付かなかった自分の姿に気が付いたというような気持であった。彼の眼には、散々厄介をかけながら好い気持でしゃべっていたわたしが、罪のない無邪気なおぼっちゃんと映ったに違いない。しかしその一言によって、(2)私の眼には、その自分の「罪

のない」ことがそれ自身罪あることと映って来たのである。それは眼が開かれたような衝撃であった。実際に、私はそれ以来自分がおとなの段階、乃至はおとなに近い段階に押し上げられたと思っている。

実はそれまでにも高等学校の頃など、時たま友人達から「世間知らず」とか「おぼっちゃん」とか言われたことがある。兄弟姉妹というものをもたない独り子として育ったので、そういうところが実際あったのかも知れない。しかしそういう場合いくら「世間知らず」といわれても、殆んど痛痒を感じなかった。というのは、少年の時に父親を失って以来、物質的にも精神的にもいろいろな種類の苦痛を嘗めて、いわば人生絶望の稜線上を歩いているような状態で、批評した友人達よりはずっと「世間」の何たるかを知っているという気持だったし、同時にまたそういう「世間」的なものを、十把一からげに自分の後にして来たような気持だったからである。しかし今度はまるで違っていた。(3) 今度は、自分が、以前に言われたとは全く別の意味において「世間知らず」であったことを知った。という事は、裏からいえば、山崎の友情が私に実感となることによって、私は彼という「人間」の存在に本当の意味で実在的に触れることが出来、そして彼という「人間」の実在に触れることにおいて、本当の意味での「世間」に実在的に触れることが出来たということである。他の「人間」に触れ、彼とのつながりのなかで自分というものを見る眼が開けて初めて、普通に世間といわれるような虚妄でない実在の「世間」に触れたように思う。自分というものにサイド・ライトが当てられたのと世間というものを知ったのとは同時であった。それまでは、本質的な意味で「世間知らず」であり、同時に「自分知らず」であった。ずっと後になって考えたことだが、仏教でよく「縁」と言うのは、今いったような意味での人間とのつながり、又あらゆるものとのつながりのことではないであろうか。それはともかく、そういう意味で「人間」に触れ、「世間」に触れたことが、絶望的な気持のなかにいた当時の私には、何か奥知れぬ所から一筋の光が射して来て、生きる力を与えてくれるかのようであった。

それにしても、ほんのちょっとした言葉が「忘れ得ぬ」ものになるのだから、言葉というものは不思議なものだと思う。現代のセマンティックス*の人々や論理実証主義*の哲学の人々が何と言おうと、言葉の本源は、生き身の人間がそれを語るというと

ころにある。忘れ得ぬ言葉ということは、他人が自分のうちへ入って来て定着し、自分の一部になることだろうが、そのなり方はいろいろである。書物から来た言葉の場合には、どんなに深く自分を動かしたものでも、それが繰返し想起され反芻(はんすう)されているうちに、初めそれが帯びていた筆者のマークがだんだん薄れてくる。言葉の抽象的な意味内容だけが自分のうちに定着して、血肉に同化したかのように自分のうちへ紛れ込んでしまう。ところが、(4)言葉が生き身の人間の口から自分に語られた場合は、全く別である。その場合には言葉は、それを発した人間と一体になって自分のうちへ入ってくる。それが忘れ得ないものになるという時には、独立した他の人間がその人間としての実在性をもって自分のうちに定着し、自分とつながりながら自分の一部になる。彼の言葉は自分のうちで血肉の域を越えて骨身に響くものになってくる。それが忘れ得ぬ言葉ということである。その言葉が想起されるたびに、言葉は語った人間の「顔」、肉身の彼自身、を伴って現われてくる。そしてその言葉を反芻するたびに、我々は我々の内部でその彼の存在の内部へ探り入り、彼を解読することになる。それによって彼はますます実在性をもってもくるし、同時にまたますます我々自身の一部にもなってくる。つまり、言葉は人間関係の隠れた不可思議さを現わしてくる。

私にとって、山崎の場合がまさしくそうであった。彼と彼の言葉を思い出す毎(ごと)に、彼はますます私に近付いてくるようでもあるし、私がますます彼のなかへ、もはや何も答えない彼という「人間」の奥へ、入って行って、彼を解読しているようでもある。(5)生きているとか死んでいるとかという区別を越えた、そういう人間関係は、夢のような話と思われるかも知れないが、私にはいわゆる現実よりも一層実在的に感ぜられるのである。明日には忘れられる「現実」よりも、何十年たってもますます実感を増すものの方が一層実在的ではないだろうか。本当の人間関係はそういう不思議な「縁」という性質があり、人間とはそういうものではないだろうか。

（西谷啓治「忘れ得ぬ言葉」〈一九六〇年〉より。一部省略）

注（＊）

チブス＝チフスのこと。

セマンティックス＝意味論。言語表現とその指示対象との関係の哲学的研究を指す。

論理実証主義＝二〇世紀初頭の哲学運動。哲学の任務はもっぱら科学の命題の論理的分析にあるとする。

問一　傍線部(1)について、なぜ「忘れ得ぬ言葉」となったのか、説明せよ。

問二　傍線部(2)はどういうことか、説明せよ。

問三　傍線部(3)はどういうことか、説明せよ。

問四　傍線部(4)のように筆者が言うのはなぜか、説明せよ。

問五　「本当の人間関係」について、傍線部(5)のように言われるのはなぜか、説明せよ。

二

次の文を読んで、後の問に答えよ。（五〇点）

ひとりの少女が直撃弾にうたれて路上に死んだ。さういふ死体は、いや、はなしのたねは、いくさのあひだ、空襲のサイレンが巷に鳴りわたつたあとには、おそらく至るところにころがつてゐたのだから、その場所が山の手の某アパートのまへであらうと、他のどこであらうと、(1)後日の語りぐさになるやうなことではない。しかし、わたしはこの小さい事件をおぼえてゐる。といふのは、当時わたしはそこのアパートの一室にひとりでくらしてゐて、少女もまたおなじ屋根の下の、となりの室に、これもひとりで住んでゐたからである。そして、少女の倒れたところは、わたしの室の窓からすだれ越しに見える鋪道の上であつた。

さういつても、わたしはかねて少女と口をきくどころか、顔すらろくに見たことがなかつた。関係といへば、ただ壁をへだてて声を聞いただけであつた。毎朝、わたしはサイレンの吠える声に依つてたたきおこされないときには、少女の歌ふ声に依つてうとうと目をさますといふたのしい習慣をあたへられた。歌はシャンソンであつた。そして、その歌の音色が青春を告げてゐた。それはいつ炎に燃えるとも知れぬ古い軒さきに、たまたまわたしの束の間の安息のために、カナリヤの籠が一つさげられたといふに似てゐた。しかし、(2)あはれなカナリヤもまた雷にうたれた。その日わたしはアパートを留守にしてゐたので、かへつて来て窓の外を見たときには、少女の死体はすでにどこやらにはこばれて、道は晩春の月の光に濡れてゐた。昭和二十年四月某日の夜のことである。

となりの室の歌声が絶えたあとに、アパートでは当分少女のうはさが尾を曳いた。ひとが室内をしらべてみると、二万円の現金とおびただしいタバコの量とが発見されたといふ。そして、ときどき少女をたづねて来た中年の紳士がその後ぷつつりすがたをあらはさないといふ。うはさにはさまざまの解釈が附せられた。しかし、わたしにとつては、解釈はもとより、うはさも不要であつた。ただ朝の軒さきにカナリヤのうしなはれたことが不吉の前兆のやうにちよつと気になつたが、それもぢきにわすれた。おもへば、(3)わたしは当時すべての見るもの聞くものとすだれ越しの交渉しかもたないやうであつた。実際に、わた

しの室の窓には一枚の朽ちたすだれがぶらさがつてゐて、それがやぶれながらに、四季を通じて、晴曇にも風雨にも、ともかく時間に堪へつづけてゐた。

越えて五月、その二十五日の夕方、Aといふ友だちが塩豚をみやげにもつてたづねて来た。ちやうど、わたしのところにちとの酒とちとの野菜とがあつた。たちまち、饗宴がひらかれた。当日は晴天であり、巷のけしきは平穏に見えた。そして、塩豚のスープは極上であつた。われわれは上機嫌で、いづれ焼けるかも知れないがなんぞと、まだ焼けてゐない現在をはかなくも恃(たの)んで、すだれからすかして見た外の世界の悪口をいつて笑つた。やがて酒が尽きると、笑もにがく、巷もすでに暗く、家の遠いAはいそいでかへつて行き、わたしはごろりと寝た。サイレンの音にねむりがやぶれたのは、それから三時間ほどのちであつた。おきて出ると、まぢかの空があかあかと燃えあがつて、火の子が頭上にふりかかつた。猛火は前後から迫つて、すなはち窓のすだれを焼いた。すだれのみならず、室内のすべて、アパートのすべて、いや、東京*の町のすべてが一夜に焼けおちた。わたしはどうやら路上の死体になることはまぬがれたが、そのときわたしのポケットには百円ぐらゐの現金と五本ぐらゐのタバコしか残つてゐなかつた。

その後、わたしはわたしの室の焼跡をただの一度も見に行つたことはない。しかるに、猛火の夜のあくる日、これは災厄に遭はずじまひのAがわざわざわたしのゐない焼跡を見舞つてくれたさうである。後日に、そのAのはなしに依ると、もとわたしの室のあつたところに、そこのいぶりくさい地べたの上に、焦げた紙きれが一枚落ちてゐたので、拾ひとつて見ると、それは古今集の一ひらであつたといふ。わたしのもつてゐた古本の山がぞつくり灰になつたあとに、どうすれば古今集の一ひらだけが焼けのこつたのか。合理主義繁昌の常識からいへば、(4)これははなしができすぎてゐて、ウソのやうにしかおもはれないだらう。しかし、決して非常識ではないAがかういふことでウソをつくとは絶対におもはれない。人生の真実のために、このはなしはウソではないと信じておかなくてはならぬ。

そのときから十年をへた今日に至るまで、わたしは窓にすだれがぶらさがつてゐるやうな室に二度と住んだことがない。またその当時にしても、毎日すだれを意識しながらくらしてゐたわけでもない。それに気がついたのは、いくさがをはつてから

年を越したつぎの春であつた。

ある日わたしは旅に出て、あたりに田圃を見わたす座敷でどぶろくをのんでゐた。すつぱいどぶろくであつた。座敷は障子をあけはなしてあつたが、片側が窓で、そこにすだれがさがつてゐた。煤けた古すだれで、いくさのあひだから長らくそこにさうなつてゐたのが、たれの気にもとめられずに、ついうち捨てられたままのふぜいと見えた。あついといふ日ざしでもないのに、すだれは風をさへぎつて、うつたうしくおもはれた。窓のそばに寄つて巻きあげようとすると、古すだれはあはや切れて落ちさうで、黒ずむまでにつもつた塵は手をふれることを禁じてゐた。それはあたかもわたしの室の焼けたすだれがここにそつくり移されて来たやうであつた。そのとき、すだれの向うに、花の色のただよふのが目にしみた。藤であつた。窓の外に藤棚があり、花はさかりであつた。

庭に出て、そこにまはつて行くと、座敷は中二階のやうなつくりになつてゐたので、窓の下と見えた藤棚はおもつたよりも高く、手をのばすと、指さきは垂れさがつた花の房を掠めようとして、それまでにはとどかなかつた。わたしは悪癖のへたな狂歌をつくつた。

むらさきの袂つれなくふりあげて引手にのらぬ棚の藤浪

(5) わたしが花を垣間見るのはいつもすだれ越しであり、そしていつもそこには手がとどかないやうな廻合せになつてゐるらしい。

（石川淳「すだれ越し」より）

注（＊）

東京の町のすべてが……＝昭和二十年（一九四五）五月二十五日、東京の中心部がアメリカ軍爆撃機による大規模な空襲を受けたこと。「山の手大空襲」と呼ばれる。

問一　傍線部(1)のように筆者が言うのはなぜか、説明せよ。

問二　傍線部(2)はどういうことか、説明せよ。

問三　傍線部(3)はどういうことか、説明せよ。

問四　傍線部(4)のように筆者が言うのはなぜか、説明せよ。

問五　傍線部(5)はどういうことか、前年(昭和二十年)の「すだれ越しの交渉」を踏まえて説明せよ。

三

次の文は、『栄花物語』の一節である。関白藤原道隆の息子である伊周（これちか）・隆家兄弟は、道隆の死後、法皇への不敬などの罪に問われ、播磨国・但馬国（いずれも現在の兵庫県）に流罪となった。その後伊周は、重病の母親を見舞うため秘かに播磨から京に戻ったところ、再び捕らえられて今度は筑紫（九州）まで流されることになった。これを読んで、後の問に答えよ。（五〇点）

今は筑紫におはしましつきたるに、そのをりの大弐*は有国*朝臣なり。かくと聞きて、御まうけいみじう仕うまつる。「あはれ、故*殿の御心の、有国を、罪もなく怠ることもなかりしに、あさましう無官にしなさせたまへりしこそ、世に心憂くいみじと思ひしに、有国が恥は端*が端にもあらざりけり。あはれにかたじけなく、思ひもかけぬ方にも越えおはしましたるかな。(1)公の御掟（おきて）よりはさしまして、仕うまつらむとす」など言ひつづけ、よろづ仕うまつるを、人づてに聞かせたまふもいと恥づかしう、なべて世の中さへ憂く思さる。御消息、わが子の資業（よしなり）*して申させたり。「思ひがけぬ方におはしましたるに、京のこともおぼつかなく、驚きながら参るべくさぶらへども、九国（くこく）の守（かみ）にてさぶらふ身なれば、(2)さすがに思ひのままにえまかりありかぬになむ、今までさぶらはぬ。何ごともただ仰せごとになむ従ひ仕うまつるべき。世の中に命長くさぶらひけるは、わが*殿の御末に仕うまつるべきとなむ思ひたまふる」とて、さまざまの物ども、櫃（ひつ）どもに数知らず参らせたれど、(3)これにつけてもすずろはしく思されて、聞き過ぐさせたまふ。そのままにただ御斎（とき）*にて過ごさせたまふ。

かくいふほどに、神無月の二十日余りのほどに、京には母北の方うせたまひぬ。あはれに悲しう思しまどはせたまふ。(4)二位の命長さ、あはれに見えたり。されどそれはむげに老いはてて、たはやすくも動かねば、ただ明順（あきのぶ）*、道順（みちのぶ）、信順（さねのぶ）などいふ人々、よろづに仕うまつり、後*の御事ども例のさまにはあらで、桜本といふ所にてぞ、さるべき屋作りて、納めたてまつりける。あはれに悲しともおろかなり。但馬には、夜を昼にて人参りたれば、泣く泣く御衣など染めさせたまふ。筑紫にも人参りにしかど、いかでかはとみに参りつくべきにもあらず。後々の御事ども、さるべくせさせたまふ。

筑紫の道は、今十余日といふにぞ参りつきたりける。あはれ、さればよ、よくこそ見たてまつり見えたてまつりにけれと、今ぞ思されける。御服など奉るとて、

そのをりに着てましものを藤衣*やがてそれこそ別れなりけれ

とぞ独りごちたまひける。

（『栄花物語』より）

注（＊）

大弐＝九州一円を統括する大宰府の、実質的な長官にあたる職名。

有国朝臣＝藤原有国。以前、道隆に嫌われ、さしたる罪もないのに官位を剝奪されたことがあった。

故殿＝藤原道隆。

端が端にもあらざりけり＝まったく取るに足らないものであった、の意。

資業＝有国の息子。

わが殿＝有国がかつて仕えていた、藤原兼家（道隆の父、伊周の祖父）のこと。

御斎＝ここでは、慎み深い生活を送ること。

二位＝「母北の方」の父、高階成忠のこと。

明順、道順、信順＝成忠の息子たち。

後の御事ども例のさまにはあらで＝火葬にせず土葬にしたことをいう。

藤衣＝喪服。

問一　傍線部(1)(2)を、適宜ことばを補いつつ、それぞれ現代語訳せよ。

問二　傍線部(3)は伊周のどのような気持ちをあらわしているか、説明せよ。

問三　傍線部(4)はどういうことを言っているか、説明せよ。

問四　文中の和歌を、指示語の指すものを明らかにしつつ、現代語訳せよ。

問題は、このページで終わりである。